

# CAROWAA

CAROWAA —チャロワ

アチョリの言語で「our village」「our home」「our land」といった意味を持つ言葉です。

JICAプロジェクトとともに自分たちの故郷がより発展する、という気持ちを込めて、グルオフィスの現地スタッフが名づけてくれました。

ちなみに配色イメージは北部らしく「ラテライト」です。



## 7月1日 新設ヌウォヤ県、新アムル県始動

7月1日、アムル県が南北に分割され、正式にヌウォヤ県と新アムル県がスタートしました。当日はヌウォヤ県の県庁所在地となるアナカ市で式典が行われる、という情報を得ましたが、前日に突然キャンセル。何か動きはないか、念のため現地に行ってみました。本当に何もなくて、式典が開催されると信じていた住民が前夜から当日早朝まで、歌や踊りで祝っていたと聞き、こちらの方が住民に申し訳ない気持ちになりました。

その後式典は再度延期され、3度目の正直、7月7日ようやく開催されました。住民を交えた華やかなセレモニーを想像して参加してみると、なんと、来年予定される総選挙までの暫定県知事選挙がメインで、その後はアムル県、ヌウォヤ県関係者や政治家たちの冗長なスピーチで1日が終わってしまったのでした。

暫定県知事選挙は新県庁舎建設（時期未定）まで仮住まいするアナカ郡事務所内の集会場にて行われ、旧アムル県から異動したヌウォヤ県議会議員の中から選出されます。旧アムル県には17名の議員がいましたが、分割で6名がヌウォヤ県所属となりました。県知事選挙とは呼べないほど小規模で、6名の議員が知事にふさわしいと思う者を指名し合う



ヌウォヤ県所属となった議員たち（男性4名、女性2名）  
選挙は誰でも見学可能。多くの住民が集まった。

という簡単な選挙ですが、首都カンパラより選挙委員会も駆け付けていました。

事前の情報では混戦の予想でしたが、既に内々に協議がなされていたようで、6名全員一致ですんなりと県知事が決定。暫定知事はプロンゴ郡出身のオリヤマ氏で弱冠32歳！大学卒業後教員経験が数年あるのみで、ほとんど社会経験のない若者に県を任せちゃって大丈夫？と開始早々、新県の行く末が心配になってしまいます。

県知事選挙後に広場で行われた式典では、県関係者や議員たちの延々と続くスピーチのみ。県分割を祝う部分はほんのわずかで、残



式典の様子



ヌウォヤ県CAO（首席行政官）（右）を  
紹介する国会議員



県議会議員の中から暫定知事に  
選ばれ宣誓するオリヤマ氏

りは来年の選挙を見込んだキャンペーンに終始していました。「県分割は大統領のおかげ。与党を支持すれば県は発展し、支持しなければ生活は悪くなる」という短絡的な言葉の繰り返しに唖然としてしまいます。新県のスタートとはいえ旧アムル県から車両や備品が分配されただけで、新たに揃えられたものは特にありません。県職員は旧アムル県から約20名が配置換えとなりました。

政府は県分割で「地元の雇用が創出される」「より細やかな行政サービスが可能になり地域が発展する」といった効果を強調しま

すが、実際は中央政府からの予算が増えるわけではなく、旧県の予算を2県で分け合うことになるため、財政はさらに逼迫し、職員の雇用や行政サービスの拡充など難しいことは目に見えていま

す。もともと脆弱であった旧アムル県の行政体制でしたが、分割によって両県ともにさらに脆弱になることが見込まれるにも関わらず、政府関係者は良い言葉ばかりを並べて情報の乏しい地域住民をミスリードしていると思わずにはられません。

チャレンジングな状況が続きますが、ウガンダ北部の復興に向けて、JICAが支援できることを探していきたいと考えています。

新聞報道によれば7月1日に新設された県は25にのぼり、アチョリ地域ではヌウォヤ県に加え、パデル県からアガゴ県が分割されました。県分割を含めた地方行政見直しの結果、国会では48議席が増える見込みで、来年の大統領選挙のために与党が必死であることが伺えます。1つの県を5分割した例もありました。

1962年の独立時には数県程度から始まったウガンダですが、現政権体制となった1980年代から細かな分割が頻りに繰り返され、正確な時期や数はウガンダ人すら把握できていない状況ですが、確認できるだけでも1997年には45県、2001年には56県、2006年には80県、今回の分割で全112県となりました。いったいどこまで続くのでしょうか。

## グルの水～どこから来て、どこへ行く？（上水編）

アムル県をはじめとした村落給水事情についてはニュースレター第6号でお伝えしましたが、今日の話題は都市給水です。

グルオフィスではウガンダ北部の中心都市であり、今後の北部復興に重要な役割を果たす、グル県グル市内の給水設備改善、給水能力向上も北部復興支援プログラムの優先課題のひとつとして位置付けたいと考えています。そのため、実際にどのような案件形成・実施が可能であるか、6月28～30日、ケニア事務所より村上広域企画調査員（給水担当）を招き、現地調査を依頼しました。グルオフィスも視察に同行し、多くの発見がありました。

### 現在の給水システム



①貯水池  
オイティノ・ダム



②浄水場

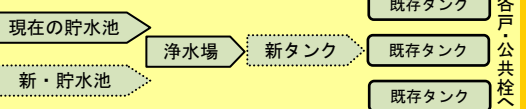


③市内3か所の貯水タンク  
→各戸、公共栓へ

グル市内の一部では上下水道が整備されており、水道公社が運営管理しています。現在の水源はグル市郊外にある「オイティノ・ダム」で、ダムとは名ばかりの貯水池です。ここにポンプ室があり、5.5キロ先の浄水場へ送水されます。このシステムが英国植民地時代の1954年に構築されたという事実に驚きです。毎日約1,500m<sup>3</sup>の水を供給していますが、現在15万人と言われるグル市内の人口をカバーするには全く足りない状況です。

浄水場はグル市内にあり、3種類の浄化槽を経て、市内3か所にある貯水タンクに送られ、そのタンクから各家庭もしくは公共水栓に送られています。浄化槽の水は本当に処理しているの？と思うほど汚いのですが、最終的には透明になっており、大腸菌もゼロとの分析結果。なのに同じ浄水場から来ているはずのオフィスの水は毎日茶色で臭いもあり、首を傾げてしまいます。水道公社では水不足に対応するため、主に①5,300m<sup>3</sup>貯水可能な新タンク建設、②新たな水源確保・取水堰建設の取り組みを進めています。①は既に建設が進んでおり、実用に向けた送水試験を実施中ですが、②については1980年代に一部工事が開始されたものの紛争で中断され、その後手つかずの状態です。グルオフィスでは後者を含めた給水設備改善を支援し、グル市内の給水能力向上に貢献できないか検討しています。

### 新システム構想



## グルの水～どこから来て、どこへ行く？（下水編）

水道公社によれば、グル市での水使用契約（各戸契約のみ、公共栓使用は除く）は約4,000世帯にもかかわらず、下水につながっているのは約500世帯にすぎないそうです。下水処理場は市内から車で10分ほどの広大な敷地内にあり、強烈な臭いとともに対応されます。しかし周辺にはハット（北部の伝統的家屋）が立ち並び、住民がごく普通に暮らしています。

下水は配管のある500世帯に加え、6m<sup>3</sup>の汲み取り車で1日4～5回運ばれて来るとのこと。処理は三段階に分かれています。薬品は一切使用せず、高低差をつけた3つの池から汚水の上澄みが順に流れるシンプルな構造となっています。

第2、第3の池は藻の影響で真緑！臭いさえなければグル観光名所になるのでは？と思うほどきれいに見えます。村上広域企画調査

員によれば、ケニアではこのような下水処理場にはカバなどの野生動物がよく住んでいるそうです。

処理後、水は川に流されますが、どの程度汚水が浄化されるのかと思いきや、臭いはだいぶ除去できているものの、色は緑のまま。大腸菌も大量に存在するとの分析結果で、自然の浄化作用があるとはいえ、河川への影響が気になります。

専門家の説明を受けながらグル市内上下水の水の仕組みを知り、今後どのような協力が適切か、より具体的なイメージを持つことができましたが、日々使用している水のビフォー・アフターを見てしまい、最近ではオフィスの水の色や臭いに過敏になっているグルオフィスの日本人スタッフです。



下水処理場



調査をする村上広域企画調査員



処理が終わり川に流される直前の水

★なんとかスタートした新ヌウォヤ県ですが、7月9日に一部地域で象の襲撃があり、住民1名が死亡、多数がけがをし、住居や畑が荒らされる被害に遭ったそうです。野生動物が多く生息する国立公園に隣接しており、この種の事故はよくあるとのこと。

★ウガンダ中が熱狂していたW杯サッカーが終わり、グルオフィスの楽しみも減ってしまいました。首都カンパラでは決勝戦を放映していたレストラン2軒で爆発事件が発生し、多数の死傷者が出た模様。日本人関係者の被害はないとのことですが、ウガンダでは後味の悪い大会になりました。